

『涅槃宗要』の如来蔵説

李 平 来

新羅元暁(六一七—六八六)の現存する著書のうち『起信論別記』『二障義』『法華宗要』『涅槃宗要』『起信論疏』『金剛三昧経論』などは「如来蔵説系統」のものであると考えられる。

その理由としては、『大乘起信論』の「一心」を根幹として説相が展開されているからである。また、師の和諍思想も「一心」に焦点をあわせて成立している。それは『起信論別記』や『涅槃宗要』の中によく顕われている。元暁は、『起信論』を「是謂諸論之祖宗、群諍之評主也」(大正四四—二六中)と言ひ、『涅槃経』を「統衆典之部分、攝三万流一味、開三仏意之至公、和三百家之異諍」(大正三八—三九上)と称している。これは、『起信論』の衆生心と『涅槃経』の仏性をともに一心と見做して、師の思想が形成されたことを示すものと考えられる。

さて、『涅槃経』を注釈する際この経の宗旨を如何に表現しているかを見ると、その師の思想家としての背景が推察

される。たとえば、江南の涅槃師・成論師等は「常住」を以てこの経の宗旨と見做していたと言ふ^③。三論の吉蔵は、彼の『涅槃遊意』の中で「無所得」を以てこの経の宗旨としている^④。しかし、元暁は『涅槃宗要』の中で「涅槃・仏性」を以てこの経の宗旨と見做している。

しからば、元暁は涅槃と仏性を以てどのように体系・組織化したのであるか。まず、その形式組織化に影響を与えたのは淨影寺慧遠の『大乘義章』であり、思想内容的に影響を与えたのは『大乘起信論』の旧訳者の真諦三蔵であると思われる。たとえば、「大涅槃」を「大減度」と訳した後、「大」の釈に古人説を引くのであるが、道生(大正三七—三七七中)、慧遠(大正三七—六一三中)及び(大正四四—八一三下)、吉蔵(大正三八—二三三上)の説と比べる場合慧遠の『大乘義章』にもっとも相似している。しかし、思想的内容に於ては全般的に考察する時、如来蔵縁起を説く真諦三蔵に接近していると思われる。

ところが『涅槃宗要』の核心を形成する「弁教宗」の中に涅槃門と仏性門が開かれる。この二門の中に『涅槃經』のあまりにも有名な「一切衆生悉有仏性」の如来藏思想が述べられている。一乗と三乗、一切皆成と五姓各別の対立を止揚、会通しようとする元暁は、衆生に仏性の有無を論じている。それは、「迦葉品」の四句を引いて凡夫位の仏性の有無を論証するが、次の通りである。

或有仏性。一闍提有。善根人無。

或有仏性。善根人有。一闍提無。

或有仏性。二人俱有。

或有仏性。二人俱無。(大正三八―二五一下)この四句を、元

暁は顯了門、就緣一門、四種意、離二辺の四門に分けて説いている。なお顯了門の依持門と緣起門は彼の『二障義』の顯了門と隱密門に对照されるべきであろう。詳しく論ずれば、前の二句を依持門に、後の二句を緣起門に当てはめている。依持門は五種性を説くのであるが、『二障義』の顯了門は三乗・五姓各別・阿頼耶識緣起説・瑜伽唯識学の立場から論を進めている。他方緣起門は因果性を顯わすのであるが、『二障義』の隱密門は一乗・一切皆成・如来藏緣起説・起信法性宗の立場から論を進めている。これは、『二障義』の中に於いて顯了・隱密の二門を開くのであるが終局には顯了門は隱密門に包摂されると同じように、この宗要に於いても依持門

は緣起門に包摂されるといふ飛躍的な論法であると考えられる。元暁のこのような発想は『大乘起信論』の一心が心真如門と心生滅門に分れて、各の自門の内容から論じられるが、最後には心生滅門は心真如門に含まれるという高次元的論法から得られたと推察される。元暁は、仏性の体を論じる時「第五師言、阿頼耶識法尔種子為三仏性体」(大正三八―二四九中)と言う新師(玄奘)の説を引くのであるが、これは依持門の前提であるだろう。次いで、「第六師云、阿摩羅識真如法性為三仏性」(大正三八―二四九中)と言う真諦三藏の説を引くのであるが、これは緣起門の前提であるだろう。では、元暁は当時印度から帰朝して三千人に及ぶ弟子と共に新仏教の流行に力を注いでいた玄奘三藏の三乗・五姓各別の唯識法相教学を強く意識したのであろう。これが依持門として顯われている。しかし、それは緣起門に吸収されてしまう。即ち、緣起門の中の二人俱有は一切衆生悉有仏性を因性として、二人俱無は果性として解釈する。多分、元暁は、仏性が衆生に於ては因であり、諸仏に於ては果であると解釈しているだろう。即ち、凡夫はまだ菩提を得ていないので因仏性はあるけれども果仏性はないというように思われる。これは、如来藏思想の当然の帰結であり、元暁の仏教観であろう。法藏は、約位の五性説によって仏性説を統合したのであるが、これは、元暁の仏性の有無説に負う所少なくなろうと考え

られる。なぜならば、均如(九三—九七三)によれば、元暁の『十門和諍論』の中にも仏性の有無を説く依持・縁起の二門があつたらしい。なお、『十門和諍論』の仏性有無門が法蔵の『五教章』所詮差別、種性差別に引かれていことが指摘されている。

ともかく、元暁の仏性の有無についての問題では一闡提成仏が如何に可能であるかの独自の解釈が注目を引くのである。

さて、次に会通門においては、仏性の義を五種に分類して説く。この中、第五の非因果非常非無常性というのは元暁の独特の説相である。これは、一心を挙げることであり、その詳説は次の通りである。

一心之体非因果。非因果故非非常非無常。若心是因不能作果。如其是不能作果良由一心非因果。故得作因果不能為因果亦作因果及為因果。是故当知前說四門染淨二因当現二果其性無一。唯是一心。一心之性唯仏所体。故說是心名為二性(大正三八—二五四中下)

ここで一心の様相がいろいろ述べられている。一心は、非因果であり、もう一方では因であり果であるという。因としての仏性は一闡提成に有り、しかし果としての仏性は、彼らはまだ凡夫であり無上菩提を成じていないので、無い、という解釈によって、元暁は一闡提成問題に決着をつけたのである。

『涅槃宗要』の如来蔵説(李)

一心こそ仏性の体であり、それが一切衆生に遍在していると
いうところに元暁の如来蔵説が窺われる。

- 1 布施浩岳著『涅槃宗の研究』六二八頁にもこの取意の文が窺われる。
- 2 拙論「元暁の真如観」(『印仏研』二九卷一号)参照。
- 3 平井俊栄「吉蔵撰『涅槃経遊意』国訳」(『駒沢仏教学部論集』第三号)はしがき参照。
- 4 『大正蔵』三八—三三一中。
- 5 布施浩岳著『涅槃宗の研究』六二〇—六三〇頁及び木村宣彰「元暁の涅槃宗要」(『仏教学セミナー』二六号)に閲説されている。
- 6 高崎直道「如来蔵思想の形成」四四四頁、注(10)に閲説されている。
- 7 拙論「元暁の二障義」(『国際東方学者会議紀要』第二六冊)参照。
- 8 第三句言二人俱有者。前二句内両重二人皆有。縁起門中因性凡有レ心者当レ得レ菩提。故第四句言二人俱無者。即第三所説二人齊無。縁起門中果性当時未レ得レ無上菩提。故。(大正三八—二五二上)
- 9 鎌田茂雄「十門和諍論の思想史的意義」(『仏教学』十一号)に閲説されている。
- 10 右に同じ。
- 11 仏性之義有無量門。以類相摂不出五種。一性淨門常住仏性。二随染門無常仏性。是二種門皆説因性。三者現果諸仏所得。四者当果衆生所含。五者一心非因果。(大正三八—二五三下)

(駒沢大学大学院)